

## 十二章 再建手術

11月の乳房再建手術の入院予定日になっても、例のごとく病院からの通知は1週間遅れるというものだった。まずはすなおに1週間待ったあとで、わたしは病院に電話をかけた。手術の予定であるが、と言うと、係の女性はひどく驚いたようすで、入院の日取りを決めるのは病院であって患者ではない、と居丈高に告げた。

これで引きさがっていても、イタリア暮らしはつとまらない。

「よく聞いて。わたしの名前はマドカ。その予定表のどこかに特にメモがあるはずよ。わたしは暮れには日本に帰るの。待てないわ」

「何ですって。そんなバカな」

主導権と威厳を奪われた彼女はあわてふためき、それでもわたしに関するメモを見つけてくれ、入院は3日後と決まった。

イタリア最後となる国際クラブの会報の記事をまだ書いていなかった。わたしはノートパソコン、息子から借りたCDプレイヤー、バッハのCD、本、雑誌など、暇つぶし用の道具と着替えをかばんに詰めた。日本で入院患者がベッドでパソコンを叩（たた）いているのはそんなに珍しい光景ではないが、イタリアでは皆無である。アメリカ人もそうだったが、イタリア人も公私を混同しない。私生活は大切なもので、仕事などというものに侵入を許しはしないのだ。

2人部屋の病室の隣の女性は、あきれてわたしを見ていた。乳がん患者はいつたいに40代以降が多いが、このモエラはまだ若かった。30歳前後で、彼氏がいい男だった。出産も結婚もまだだと言う。あまり話がはずまなかったのは残念だったが、代わりに別の病室の女性たちと数人でおっぱいを見せ合うことになった。

中年以降でなければあんなにあっけらかんとはいくまい。乳房を今から切ろう、とか再建しよう、という患者にとっては非常にいい情報交換である。なかに、すでに数年前に乳房を再建したのだが、横のわき腹のたるみや変形がひど

くなったので再手術、という女性がいた。彼女は乳首も再建していたが、ぱっと見にはあると思わなかった。本物の乳首が、赤ん坊が乳を吸いやすいように太く立っているのに比べ、偽の乳首は一応それらしい格好をしてはいたが、ヘナンと横を向いて、いかにも頼りなかったのである。皮膚をつまみ上げて輪に縫い縮めることで隆起させ、入れ墨のように色素を入れる、というやり方だと聞いていたから、芯があるわけでもなく、しょうがあるまい。たぶんもうひとつの理由は、白人は黄色人に比べ乳首の色も薄いから、際立って見えないことだろう。

「これなら要らない」とわたしは思った。乳房の再建手術の半年後という乳首の手術時期にはもう日本に永久帰国しているから、元から乳首は再建しない予定だったが、それを残念に思う必要はなさそうだった。

もうひとつの発見は、ホットケーキをくっつけたような、日本人のペッターコ級の小さい胸のひとつも中にいたことだった。「あらあんた小さいのね」と言われ、そうなのよ、小さいのよ、お乳はちゃんと出たんだけどね、と笑っている。そうか、イタリア人でも全員がポインではないのか、と安心する。

手術の前日、中に入れるシリコンを選ぶため、わたしは上半身はだかで数人の形成外科医の前に立った。せいぜい胸を張り、腹をひっこめる。シリコンのカタログを見ると、まん丸ではなく、自然の乳の形のように、上がやや薄く下が厚い。大きさと垂れ方（！）で何種類かある。そうか、歳をとったひとには垂れた形のシリコンを入れるのか、と感心した。反対側の、まだ残っている乳房にシリコンの形と大きさを合わせるのだが、わたしがついでにこっちにも少しシリコンを入れて豊胸手術をしてくれと頼んでおいたものだから、医師たちの議論が長引いた。

イタリア人は議論好きである。というより、単なるおしゃべり好きというべきか。現状を正確に理解して必要な条件を組み立て、手早く結論を出す、という論理的かつ効率的な思考法はかけらも持ち合わせていない。ヨーロッパ諸国の中でも最悪である。

以前息子のサッカークラブの年度初め、1 チームを組むにはその年齢の子の

人数が足りなくなってきたので、今までのチームを解散するか、隣町のチームにそろって入れてもらうかについて、十数人の親で話し合ったことがある。ミラノでは基本、チームは年齢別だった。だから先輩後輩の上下関係がない。息子のチーム名はずっとオタタセツテ、つまり生まれ年の 87。

最初の親が俺はこういう理由でこの意見だ、と穏やかに言ったあとで、まったく同じ理由と同じ意見を、次の親が同じくらいの時間をかけて、手を振りまわし熱を込めてしゃべった。「あいつと同じ意見だ」と言えば一言ですむのに、である。わたしは最初自分の耳、つまりイタリア語の理解能力を疑った。が、その後、女親だろうが男親だろうが何人も同じ理由と意見を繰り返すのを聞いているうちに、自分の耳が正しいとわかり、英語で言う（下）顎ががくんと落っこちた状態になった。日本語で言う、あいた口が塞がらなくなったのである。

しかも、じゃあまとめようね、というときになっても司会役の母親までが、もう一度同じことをまくしたてねば気がすまない。「コイツらに耳と脳ミソはないのか？ 口しかないのか!？」とうんざりしていると、ドイツ人の父親が少し離れて立っている。「長いよね」と話しかけると、「おんなじことを何度も繰り返して。ドイツなら 5 分で話はずいてるよ」と苦々しげに首を振る。結局全員が、そろって隣町のチームに合流、という同じ意見だったのに、1 時間半かかった。

その記憶から考えると、今回のシリコン決定も、たぶんあんなに時間をかける必要はなかったのだろうと思う。医師たちはシリコンの大きさを右 420 グラム、左 90 グラムと決めたあと、型番をわたしの胸にマジックで書いた。これならいくらイタリア人がいいかげんでも、手術時にまちがえることはなかろう。右と左の乳房の位置が違わないように、シリコンを入れる上端と下端の線も書き、ガーゼで覆った。病室に帰ったわたしは、ほかの手術前の女性たちにそれを見せて回った。ついでに反対側の乳房も見える。あら、きれいなおっぱいしてるじゃないの、と言われ、ちょっと嬉しかった。ホルスタイン級のおっぱいが、歳をとると容赦なく臍のあたりまで垂れるのに比べ、小さめのおっぱいは

垂れにくい。

街ではときに、乳と尻が歩いてきた、とでも言いたいほど見事な体型の若い女性が、それを見せびらかすようにぴったりしたＴシャツとジーパンでツンとすまして歩いていて、横を見るとじい様が口をあけて見送っていたりする。

地中海沿岸特有の、とイタリア人は言うのだが、街を歩く女性の多くは肩幅が広く、手足が長く細く、そして砂時計のようにウエストがキュッとくびれている。あれはもう、日本人がどう逆立ちしてもできない生まれつきの体形で、「ずるい……」と言いたくなる。

男性のからだも同様で、この生まれながらの美しいからだがあるからこそ、ギリシア彫刻以来、芸術作品でも連綿と人間のからだの美しさを大事にするのだなあ、と思う。変化に富んだポーズの、あちこちの広場の武人や神話の神々の像、教会の屋根の聖人像、噴水を囲む女神や天使の像を見ると、そのモデルになった均整のとれた人間のからだがいかに美しいかは、日常生活にしみわたっている。

日本に帰ると、正直、少女像や青年像にずいぶんな違和感がある。日本人の体型では見栄えがしない、という理由もあるだろうが、何も、格好がいい、が美しいとは限らない。なんともいえず、いい、存在感がある、目が離せない、というのが「うつくしい」「いい」芸術作品ではないかとわたしは思う。別の強固な美意識が必要なのではないか。

現代イタリア人にも肥満はいる。日本と同じくらいの割合か。しかし、きつくてボタンがはちきれそうになるような服を着ているひとはいない。あれは余計肥って見えるし、みっともない。わたしのオーボエの先生のリッカルドなど、たぶん体重はわたしの倍以上の130キロくらいあると思うのだが、背広にしろポロシャツにしろ、いつもちゃんと自分のサイズの服を着ているのには感心した。サイズの合った服を着ていると、太っていてもきちんと見える。デブ、とは言いにくくなる。

アメリカだと肥満はまるで珍しくないうえに、スウェットスーツのような伸

び縮みする気楽な服を着て、余って垂れた尻の肉をポヨヨン、ポヨヨン、と揺らしながら歩いているひとがよくいた。髪もしばらく美容院に行っていない気配で、もうおしゃれは諦めたのかしら、と思ったものだ。

イタリア人は肥えてもおしゃれを諦めない。髪も常に短め、こざっぱり。これだけでまず違う。わたしがアレーゼで4軒目にしてやっと見つけたお気に入り美容院で順番を待っていると、同じく待っているとおぼしき若い男の髪が、わたしの目にはどう見ても昨日切ったばかりくらいの長さである。いったいこの男は何をしに来たのだろう、彼女にでもくっついて来たのだろうかといぶかっていると、いやいや、やっぱり髪を切りに来たのだった。短い髪をさらにバリカンで刈り上げ、格好をつけ、なるほどシャキッといい男になった。

こうしてみると、髪がちょうどいい長さを通り越してしまっている、というのはそれだけでおしゃれではないのだとつくづく思う。不精者のわたしにはきつい習慣だった。

もっとも、ミラノのおしゃれで最初に驚いたのは色だった。徹底的に同色系で合わせる。ヨーロッパに「色を着る」ということばがあるのは知っていたが、これかと思った。よく見るパターンは、濃淡や多少の柄の違いを含め、赤なら赤系、青なら青系で上から下までそろえる。灰色や白などを除いて基本、服の色は1系統。中年男性でも、服だけでなく帽子から靴、かばんまで緑系、あるいは茶系、というのを見たことがある。この場合、前にも少し書いたが、単に単色系というだけでなく「色調をそろえる」がミラノファッションの基本中の基本で、たとえば同じ緑でも黄緑は青緑と合うとは限らないが、町で不似合いな緑の組み合わせのひとを見たことはない。朱色でも、赤紫とは合うが青紫とは合わないから、彼らは絶対に一緒に着ない。

どちらかと言えば不美人で、ひどく不愛想な中年太りの郵便局員が、モスグリーンの子セーターにほぼ同色のスカート、さらにはそれにピッタリの薄い色のモスグリーンのスカーフを首にさらりと巻いているのを見たときには、わたしは数分間見とれてしまった。一つひとつの色そのものが実にきれいだったうえに、統一感が見事だったのである。別々に買ったらしいのに、どうやってこれ

だけ合う色を探し当てたのか舌を巻いた。

すると、しばらくして、市場の屋台に吊るされたくすんだ青のスカートに、自分が持っているバッグから灰青のセーターをちらりと出して合わせている女性を見た。ははあ、こういう手間を惜しまないのがミラノっ子のおしゃれの秘訣か、と納得がいった。そして、小さいころから両親祖父母が色に敏感ななかで育っているから、10代の子が前衛的で崩した格好をしていても、どうにもならないほどみっともないのはほとんどいない。

ブティックでも、ショーウィンドーに並べたいくつかの服の色の統一感といったら、ため息が出るほど美しい。さすがミラノ。店員も、服のサイズや色が客に似合っていないと判断すると、客に聞かれた場合には正直にそう言う。プロである。日本の店員は売り上げが第一なせいか、客の機嫌を損ねないことが大事なせいか、たとえ内心まるで似合わないと思っても、客に「やめておいたほうが……」とはまず言わないのと大違いである。

それを考えると、微妙な色合わせや試着のできない通信販売は、イタリアではまず流行らないのではないかと夫は言う。

そして、アクセサリ。どうもミラノでは不可欠らしい。もちろん、服と色をそろえる。

サファイヤやルビーのような「ほんものの」宝石はとても高くて買えないが、半貴石と呼ばれる安いものなら、わたしでもネックレス、ピアス、指輪が同じ石でそろえられる。緑の服ならマラカイト、青の服ならラピスラズリ、紫の服なら紫水晶（アメジスト）、茶の服なら琥珀（こはく）、と安い店を見つけてせっせと買った。

そうでなかったら、ウチに週1で掃除に来るシルヴィアのように金のピアスやネックレス。これなら服の色を選ばない。わたしも帆立貝型の金色のピアスを買ってつけていたら、息子が「あ、母さん、ガソリンスタンドのマーク！」と言ってくれたのにはがっかりしたが。

田舎者のわたしも毎日がんばって服の色調をそろえた。ある日、黒のサンダル以外は全部、ブラウスとスカート、ハンドバッグからネックレス・ピアスマ

で同系統の緑色の濃淡で統一して歩いていると、近所の仕立屋さんから「モルト・ミラネーゼ（まさにミラノ的）」とニコリ笑って言われた。努力が報われた嬉しさに、わたしも「グラッツィエ・ミレ（どうもありがとう）！」と満面の笑みを浮かべて答えた。

ときには着物を着て外出することもあった。

アメリカに住んでいたころ、最初は欧米の生活に合わせることにしか考えていなかったのだが、寿司のように、日本らしさをうまく出せば歓迎されるということがわかってきた。ならば着物はウケるに違いないと考え、イタリアに来る前に、まず安物の着物と着付けの本を適当に買って着付けを猛練習した。

しかし、それまでほとんど着物を着たことがなかったわたしの独学では、あちこちおかしい。子どもの保育園の先生に「あ～らあら、肌襦袢（はだじゅばん）がないわね～」と冷やかされるまで、わたしは上半身だけの短い肌襦袢と、足元まである長い襦袢との違いさえ、よくわかっていなかった。恥ずかしさに顔が赤くなるだけでなく全身が熱くなったが、おかげでひとつ学習した。

で、イタリアでの1年目、夫の同僚のイギリス人宅に招かれた際その着物を着てみたのだが、我ながらどうもパツとしない。着物の柄がまるでダサかった。

そこで次の夏の一時帰国の際にもっとおしゃれな着物を買うことにし、ミラノファッションの基本どおり色調を合わせて、鶯（うぐいす）色の地に大輪のクリーム色の花を散らした着物と、薄緑色の帯、それに深緑の帯締めの一式を選んだ。なぜかそのころは緑づいていた。もちろん全部化繊の安物である。

冬のパーティで着ると、狙いどおり大人気。

3年目の12月、同じ日の昼間に国際クラブのパーティ、夜に子どものサッカークラブの打ち上げが近所で開かれる予定だったので、わたしは両方着物を着て出ることにした。すると子どもの歯の治療のため、そのあいだの午後、ミラノ中心部の歯医者に予約が入ってしまった。

では、そこにも着物で出かけるの？ それとも2度着替える？

迷ったが、どう考えても着替えるのはめんどくさい。着付けに慣れていない

わたしは途中でやり直しが多く、1回着物を着るのに1時間半かかるのだ。ええい、ままよ、と着物でミラノの地下鉄に乗った。バッグも当然緑。

すると電車の中で見知らぬ2、3人から「ステキ」と褒められた。

そのうえ駅では、「見て、ナンてきれい」という声が聞こえる。振り返ると、若い女性がふたり、賞賛の眼差しでわたしを見ているではないか。

きゃー、ミラノっ子から「なんてきれい」とまで言われた！！

そのときほど、わたしの鼻が高くなったことはない。

イタリアで、日本人と違うな、と思うのは、日本人は細くさえあればスタイルがいい、と言われる傾向があるが、その手の細さはイタリアでは「鉛筆みたい」と褒められないことだ。曲線が必要なのである。胸だけではなく、尻もある程度大きいほうが釣り合いがとれる。イタリアでは丸く突き出た尻を、楽器のマンドリンのような、と言うそう。確かに似ている。その見事な曲線をあらわすパンツ姿には、スカートよりよほど色気が出る。日本人のペタンコな尻では絶対に出ないセクシーさである。

アメリカに住んでいたときも不思議だったが、白人だけでなく黒人も含め、男も女もパンツ（ズボン）姿がやけにかっこいい。あれは中身が違うのか「外身」が違うのか、考えこんだ。日本に帰って母に話すと、戦後進駐軍がいたころ、母も同じ疑問を抱いたという。

「そのうちわかったいね。しばらくしたら、進駐軍のお下がりを日本の男も履（は）きだしたんよ。つぁあらなかった（ダメだった）。格好がええのはズボンのせえじゃあなかった。中のお尻が違うたんよ」

確にかっこいいイタリアのパンツをわたしが履いても、鏡を見るとお尻の下にしわというかたるみができる。見方を変えれば、そのパンツはわたしの体型に合っていないということだろうか？ その疑問を近所の仕立屋さんに、夫が背広をオーダーメイドしたときに尋ねてみた。小柄な彼は趣味にクラシックギターを爪弾き、すわり仕事のからだを伸ばすのにサイクリングに出るという、年配ながらしゃれたイタリア男で、丁寧に説明してくれた。やはり、型紙が違



うと言う。尻の大きさと形に合わせて、後ろ中央から股下にくるカーブの角度と長さを変えらると言っていた。

あいや、型紙から違うのでは、わたしのお尻に合わないパンツを、どうにか自分でちょこちょこっと縫い直してカッコよくしてやろうと思っていたのに、とても無理だ。がっかり。そのうちわたしもオーダーメイドしてみるか。

イタリア人はちゃんと、しわやたるみの出ない、からだにあった服を着る。きれいに見せるコツをよく知っているのだ。男のズボンの裾も同様で、長さを合わせるときに、前が靴でひっかかってたるんでしまわない、短めの丈を選ぶ。日本人は丈を踵（かかと）に合わせる傾向があるから、足の甲の上でしわがよっても気にしないが、イタリアではこれは長過ぎてみっともないらしい。慣れるのに少し時間がかかったが、慣れると、甲の上でたるみが出ないズボンはきれいだということがよくわかる。頭の前から爪先まで、ずっと一直線に形が落ちる。

また、買った服を体型に合わせるための縫い直しをマメにする。これもおしやれには欠かせない。たいていのクリーニング屋で、補正の受付をしてくれから便利である。

さて、乳房の再建手術に話を戻すと、前回と同じく、入院させておいて手術はいつかわからない、たいてい1週間後、という患者がぞろぞろいるなかで、1カ月後日本に帰る、というわたしの手術は早かった。といっても日本ではあたりまえの日程で、入院の翌日である。

絶食絶飲したあとで手術着に着替え、ストレッチャーに乗せられて扉をいくつもくぐり、エレベーターや廊下をずいぶん遠くまで運ばれた。麻酔医に静脈注射を打たれて「じゃあお休み」と言われ、「1、2、3」まで数えるのを聞いたのを最後に、何もわからなくなった。次に目をあけた瞬間には、すでに病室のベッドに戻っている。

そうっとからだを動かしてみる。幸い、それほど痛くない。最初の摘出手術のあとは痛くて身動きもならなかったが、それに比べると段違いに楽だ。傷も、

前回はリンパ節を取るため腋（わき）のくぼみの中央部から斜め下に向けて乳房を貫通し、20センチはたっぷりあったのが、今回は乳房の部分だけなので半分ほどに過ぎない。ドレンと呼ばれる膿（う）みを出すチューブも1本だけ。

前回の手術が一緒だったマリアンジェラが見舞いに来てくれた。さほど巨乳ではない彼女はわたしの話を聞いて、もう片方の乳房にもシリコンを足す、という考えに興味をそそられたようだった。なんせ無料（タダ）である。

彼女は普通どおり摘出手術後に化学療法を受けて、ハゲ頭から髪が伸びかけの時期に入り、かつらをつけていた。

「ほら、これだけ伸びたのよ」

嬉しそうにかつらをずらして髪を見せる。

「あら、よかったわねえ。順調じゃない。でもわたしは髪が2、3センチのころよりはツルツパゲのときのほうが色っぽくって好きだったわ」とわたしが言うのと、

「そうそう、短い髪があるよりは、ハゲのほうがきれいよね」

マリアンジェラだけでなく隣のベッドの愛想なしのモエラも意見が一致して、3人で大笑いした。

今回は順調に1週間で退院し、しばらく休養したのち引っ越しの準備にかかることになった。2、3回通院して傷口のガーゼがなくなってみると、再建手術をした乳房はイメージと少し違って、「あれ？」と思わされた。

まず形。自然のお乳には乳首がついているせいもあり真ん中が尖り気味なのに比べ、シリコンのお乳は「肉まん」型で、真ん中が平らである。ブラジャーの真ん中にしわができる。パッドを切って当てて縫わなければ。

それから柔らかさ。シリコンは張りがあり過ぎるといえるのか、やや硬い。わたしが40代だし、4人の子が乳を吸ったあとだから、20代のお乳に比べたら柔らかい、というのはあるだろうが、それでもシリコンのお乳は自然のお乳の柔らかさとは違う。

皮膚が無感覚なのも相変わらずである。性的ななまめかしい感覚にまるで欠

けるのも、ま、当然。しょうがない。

とはいえ、わたしがもっと自然のお乳に近いものを想像していたのが、勝手だったのかもしれない。なんだ、こんなものだったのか、という期待外れの感じだが、では、もし再建していなかったら、と考えると右の胸はまるで平らであつたはずで、それに比べたらやはり、なんであれ丸いでっぱりがあるというのは、かなりいいことなのだろう。

左の健康なお乳に足したシリコン 90 グラムの効果は、ブラのサイズがひとつ上がったことだった。これはおおいに満足である。が、切って縫われた線が、元々のお乳の一番下の部位からまっすぐ横に伸びているので、今まで曲線だつたお乳の下側が直線になって、お乳が横流れ気味になってしまった。

そしてシリコンはどちらの胸も大胸筋の下に入れてあるので、ガッツポーズをして腕に力を入れると、大胸筋がクイクイと動くのがわかる。ボディビルダーがやって見せるヤツに近い。わたしは学生時代運動部にいて腕立て伏せを床に鼻がつくまで1日100回、なんてやっていたので以前から大胸筋は動かせたが、シリコンのおかげで余計はっきりしたようである。

ついでに立って尻に力を入れると、左右の尻の筋肉がクイクイと上下する。小鼻をヒクヒク大きくしたり小さくしたりもできるので、3点セットで宴会芸にしようかしらん。

もうひとつ、困ったものだと言を眺めることがある。きつい化学療法が終わるやいなや、6キロ痩せたのをとり戻すべく1カ月1キロの割で太り始めたのはよかったのだが、1年過ぎてもそのペースは止まらず、とうとう体重が12キロも増えてしまったのだった。自分の考える適正体重より4キロも多い。すると、ウエストのくびれは乏しく、下腹のでっぱりはかなり大きい。

おかげで迷った末に大きくした胸がさっぱり目立たない。おしゃれでない。複雑な気分である。

ま、がんに比べたら、はるかに平和でぜいたくな悩みだ、ということにしておこう。